

# 親子

有島武郎

青空文庫



彼は、秋になり切った空の様子をガラス窓越しに眺めていた。

みずみずしくふくらみ、はつきりした輪廓りんかくを描いて白く光る

あの夏の雲の姿はもう見られなかった。薄濁った形のくずれたのが、狂うようにささくれだつて、澄み切った青空のここかしこに屯たむろしていた。年の老いつつあるのが明らかに思い知られた。彼はさきほどから長い間ぼんやりとそのさまを眺めていたのだ。

「もう着くぞ」

父はすぐそばでこう言った。銀行から歳暮によこす皮表紙の懐中手帳に、細手の鉛筆に舌の先の湿りをくれては、丹念に何か書きこんでいた。スコッチの旅行服の襟えりが首から離れるほど胸を落

として、一心不乱に考えごとをしながらも、気ぜわしくなくこんな注意をするような父だった。

停車場には農場の監督と、五、六人の年とし嵩かさな小作人とが出迎えていた。彼らはいずれも、古手拭と煙草道具たばこと背負い繩なわとを腰にぶら下げていた。短い日が存分西に廻って、彼の周囲には、荒くれた北海道の山の中の匂いだけがただよっていた。

監督を先頭に、父から彼、彼から小作人たちが一列になって、鉄道線路を黙りながら歩いてゆくのだったが、横幅のかった丈けの低い父の歩みが存外しつかりしているのを、彼は珍しいものように後から眺めた。

物の枯れてゆく香においが空気の底に澱よどんで、立木の高みまではい

上がっている「つたうるし」の紅葉が黒々と見えるほどに光が薄れていた。シリベシ川の川瀬の昔に揺られて、いたどりの広葉が風もないのに、かさこそと草の中に落ちた。

五、六丁線路を伝って、ちよつとした切<sup>きりざし</sup>崖を上がるとそこは

農場の構えの中になっていた。まだ収穫を終わらない大豆畑すらも、枯れた株だけが立ち続いていた。斑<sup>まだ</sup>ら生えのしたかたくな

雑草の見える場所を除いては、紫色に黒ずんで一面に地膚をさらけていた。そして一か所、作物の殻を焼く煙が重く立ち昇り、ここかしこには暗い影になって一人二人の農夫がまだ働き続いていた。彼は小作小屋の前を通るごとに、気をつけて中をのぞいて見た。何処<sup>どこ</sup>の小屋にも灯はともされずに、鍋の下の囲<sup>いろり</sup>炉裡火<sup>りび</sup>だけが、

言葉どおりかすかに赤く燃えていた。そのまわりには必ず二、三人の子供が騒ぎもしないできよとんと火を見つめながら車座にうずくまっていた。そういう小屋が、草を積み重ねたように離れ離れにわびしく立っていた。

農場の事務所に達するには、およそ一丁ほどの峻けわしい赤土の坂を登らなければならぬ。ちようど七十二になる彼の父はそこにかかるとさすがに息切れがしたとみえて、六合目ほどで足をとどめて後をふり返った。傍見わきみもせず足にまかせてそのあとに※ついて行った彼は、あやうく父の胸に自分の顔をぶつけそうになった。父は苦々しげに彼を尻目にかけた。負けじ魂の老人だけに、自分の体力の衰えに神経をいら立たせていた瞬間だったのに相違ない。

しかも自分とはあまりにかけ離れたことばかり考えているらしい息子の、軽率な不作法が癩しやくにさわったのだ。

「おい早田」

老人は今は眼の下に見わたされる自分の領地の一区域を眺めまわしながら、見向きもせず監督の名を呼んだ。

「ここには何戸はいつているのか」

「がけち崖地に残してある防風林のまばらになったのは盗伐ではないか」

「鉄道と換え地をしたのはどの辺にあたるのか」

「藤田の小屋はどれか」

「ここにいる者たちは小作料を完全に納めているか」

「ここから上る小作料がどれほどになるか」

こう矢継ぎ早やに尋ねられるに對して、若い監督の早田は、格別のお世辞気もなく穏やかな調子で答えていたが、言葉が少し脇道にそれると、すぐ父からきめつけられた。父は監督の言葉の末にも、曖昧あいまいがあつたら突つ込もうとするように見えた。白い齒は見せないぞという気持ちだが、世故に慣れて引き締まった小さな顔に気味悪いほど動いていた。

彼にはそうした父の態度が理解できた。農場は父のものだが、開墾は全部矢部という土木業者に請負わしてあるので、早田はいわば矢部の手に入れた監督に当たるのだ。そして今年になって、農場がようやく成墾したので、明日は矢部もこの農場に出向いて来て、すっかり精算をしようというわけになつてゐるのだ。明日



の授受が済むまでは、縦令<sup>たとえ</sup>永年見慣れて来た早田でも、事業のう  
え、競争者の手先と思わなければならぬという意識が、父の胸に  
はわだかまっているのだ。いわば公私の区別とでもいうものをこ  
れほど露骨にさらけ出して見せる父の気持ち、彼はなぜか不快  
に思いながらも驚嘆せずにはいられなかった。

一行はまた歩きだした。それからは坂道はいくらもなくって、  
すぐに広々とした台地に出た。そこからずっとマツカリヌプリと  
いう山の麓<sup>ふもと</sup>にかけて農場は拡がっているのだ。なだらかに高低の  
ある畑地の向こうにマツカリヌプリの規則正しい山の姿が寒々と  
一つ聳<sup>そび</sup>えて、その頂きに近い西の面だけが、かすかに日の光を照  
りかえして赤ずんでいた。いつの間にか雲一ひらもなく澄みわた

つた空の高みに、細々とした新月が、置き忘れられた光のように  
冴<sup>さ</sup>えていた。一同は言葉少なになつて急ぎ足に歩いた。基線道路  
と名づけられた場内の公道だつたけれども畦<sup>あぜ</sup>道をやや広くした  
くらいのもので、畑から抛<sup>ほう</sup>り出された石ころの間なぞに、酸漿<sup>ほうずき</sup>  
の実が赤くなつてぶら下がつたり、轍<sup>わだち</sup>にかけられた露<sup>ふき</sup>の葉がどす  
黒く破れて泥にまみれたりしていた。彼は野生になつたテイモシ  
ーの莖を抜き取つて、その根もとのやわらかい甘味を嚙<sup>か</sup>みしめな  
どしながら父のあとに続いた。そして彼の後ろから来る小作人た  
ちのささやきのような会話を耳を傾けた。

「夏作があんなだに、秋作がこれじゃ困つたもんだ」

「不作つづきだからやりきれないよ全く」

「そうだ」

ぼそぼそとしたひとりごとのような声だったけれども、それは明らかに彼の注意を引くように目論もくろまれているのだと彼は知った。それらの言葉は父に向けてはうつかり言えない言葉に違いない。しかし彼ならばそれを耳にはさんで黙っているだろうし、そしてそれが結局小作人らにとって不為めにはならないのを小作人たちは知りぬいているらしかった。彼には父の態度と同様、小作人たちのこうした態度も快くなかった。東京を発たつ時からなんとなくいらいらしていた心の底が、いよいよはつきり焦いらつくのを彼は感じた。そして彼はすべてのことを思うままにぶちまけることのできない自分をその時も齒は痒がゆく思った。

事務所にはもう赤々とランプがともされていて、監督の母親や内儀おかみさんが戸の外に走り出て彼らを出迎えた。土下座せんばかりの母親の挨拶などに対しても、父は監督に対すると同時に厳格な態度を見せて、やおら靴を脱ぎ捨てると、自分の設計で建て上げた座敷にとおつて、洋服のままきちんと囲炉いろり裡の横座にすわつた。そして眼鏡をはずす間もなく、両手を顔にあてて、下の方から、禿はげ上がった両鬢りょうびんへとはげしくなで上げた。それが父が草臥くたびれた時のしぐさであると同時に、何か心にからんだことのある時のしぐさだ。彼は座敷に荷物を運び入れる手伝いをした後、父の前に座を取つて、そのしぐさに対して不安を感じた。今夜は就寝おそがきわめて晩おそくなるなと思つた。

二人が風呂から上がると内儀おかみさんが食膳を運んで、監督は相伴なしで話し相手をするために部屋ほての入口にかしこまった。

父は風呂で火照ほてった顔を双りようて手でなで上げながら、大きく氣息いきを吐き出した。内儀おかみさんは座にたえないほどぎごちない思いをしているらしかった。

「風呂桶をしかえたな」

父は箸を取り上げる前に、監督をまともに見てこな詰じるようなに言った。

「あまり古くなりましたんでついこの間……」

「費用は事務費で仕払ったのか……俺わしのほうの支払いになつて  
いるのか」

「事務費のほうに計上しましたが……」

「矢部に断わったか」

監督は別に断わりはしなかった旨を答えた。父はそれには別に何も言わなかったが、黙ったまま鋭く眼を光らした。それから食膳の豊かすぎることを内儀おかみさんに注意し、山に来たら山の産物が何よりも甘いうまのだから、明日からは必ず町で買物などはしないようにと言ひ聞かせた。内儀さんはほとほと氣息いきづまるように見えた。

食事が済むと煙草を燻くゆらす暇もなく、父は監督に帳簿を持って来るように命じた。監督が風呂はもちろん食事もつかっていないことを彼が注意したけれども、父はただ「うむ」と言っただけで、

取り合わなかつた。

監督は一抱かかえもありそんな書類をそこに持つて出た。一杯機嫌になつたらしい小作人たちが挨拶を残して思い思いに帰つてゆく気配が事務所の方でしていた。冷え切つた山の中の秋の夜の静まり返つた空気の中を、その人たちのあしおと跽音がだんだん遠ざかつて行つた。熱心に帳簿のページを繰つてゐる父の姿を見守りながら、恐らく父には聞こえていないであろうその跽音を彼は聞き送つていた。彼には、その人たちが途中でどんなことを話し合つたか、小屋に帰つてその家族にどんな噂うわさをして聞かせたかがいろいろに想像されていた。それが彼にとつてはどれもこれも快いと思われ  
るものではなかつた。彼は征服した敵地に乗り込んだ、無興味な

一人の将校のような気持ちを感じた。それに引きかえて、父は一心不乱だった。監督に対してあらゆる質問を発しながら、帳簿の不備を詰<sup>な</sup>つて、自分で紙を取りあげて計算しなおしたりした。監督が算盤<sup>そろばん</sup>を取りあげて計算をしようと申し出ても、かまいつけずに自分で大きな数を幾度も計算しなおした。父の癖として、このように一心不乱になると、きわめて簡単な理屈<sup>こゝと</sup>がどうしてもわからな<sup>い</sup>と思われ<sup>る</sup>ようなことがあつた。監督が小言<sup>こゝと</sup>を言われながら幾度も説明しなおさなければならなかつた。彼もできるだけ穏やかにその説明を手伝つた。そうすると父の機嫌は見る見る険悪になつた。

「そんなことはお前に言われんでもわかつてい<sup>る</sup>。俺<sup>わ</sup>しの聞くの



はそんなことじゃない。理屈を聞こうとしとるんじゃないのだ。

早田は俺しの言うことが飲み込めておらんから聞きただしているのじゃないか。もう一度俺しの言うことをよく聞いてみるがいい」

そう言つて、父は自分の質問の趣意を、はたから聞いているときわめてまわりくどく説明するのだったが、よく聞いていると、なるほどとうなずかれるほど急所にあたつたことを言つていたりした。若い監督も彼の父の質問をもつとありきたりのことのように取つていたのだ。監督は、質問の意味を飲み込むことができるはと確たと答えに窮したりした。それはなにも監督が不正なことをしていたからではなく会計上の知識と経験との不足から来ているのに相違ないのだが、父はそこに後ろ暗いものを見つけてもした

ようにびしびしとやり込めた。

彼にはそれがよく知れていた。けれども彼は濫<sup>みだ</sup>りなさし出口はしなかった。いささかでも監督に対する父の理解を補おうとする言葉が彼の口から漏れると、父は彼に向かって悪意をさえ持ちかねないけんまくを示したからだ。彼は単に、農場の事務が今日までどんな工合<sup>ぐあい</sup>に運ばれていたかを理解しよう<sup>つと</sup>とだけ勉めた。彼は五年近く父の心に背<sup>そむ</sup>いて家には寄りつかなかつたから、今までの成り行きがどうなっているか皆目見当がつかかなかつたのだ。この場になって、その間の父の苦心というものを考えてみないではなかつた。父がこうして北海道の山の中に大きな農場を持つとうと思ひ立つたのも、つまり彼の将来を思つてのことだということもよ

く知っていた。それを思うと彼は黙って親子というものを考えた  
かった。

「お前は夕飯はどうした」

そう突然父が尋ねた。監督はいつものとおり無表情に見える声  
で、

「いえなに……」

と曖昧あいまいに答えた。父は蒲団ふとんの左角にひきつけてある懐中道具  
の中から、重そうな金時計を取りあげて、眼を細めながら遠くに  
離して時間を読もうとした。

突然事務所の方で弾条ゼンマイのゆるんだらしい柱時計が十時を打っ  
た。彼も自分の時計を帯の間に探ったが十時半になっていた。

「十時半ですよ。あなたまだ食わないんだね」

彼は少し父にあたるような声で監督にこう言った。

それにもかかわらず父は存外平気だった。

「そうか。それではもういいから行って食うといい。俺わしもお前の年ごろの時分には、飯も何も忘れてからに夜ふかしをしたものだ。仕事をする以上はほかのことを忘れるくらいでなくてはおもしろくもないし、甘くうまゆくもんでもない。……しかし今夜は御苦労だった。行く前にもう一言お前に言っておくが」

そういう発端で明日矢部と会見するに当たつての監督としての位置と仕事を父は注意し始めた。それは懇ねんごろというよりもしちくどいほど長かった。監督はまた半時間ぐらい、黙つたまま父の

言いつけを聞かねばならなかった。

監督が丁寧に一礼して部屋を引き下がると、一種の気まずさをもつて父と彼とは向かい合つた。興奮のために父の頬は老年に似ず薄紅くなつて、長旅の疲れらしいものは何処どこにも見えなかつた。しかしそれだといつて少しも快活ではなかつた。自分の後継者であるべきものに対してなんとなく心置きのあるような風を見せて、たとえば懲こらしめのためひどい小言を与えたあのような気まずい沈黙を送つてよこした。まともに彼の顔を見ようとはしなかつた。こうなると彼はもう手も足も出なかつた。こちらから快活に持ちかけて、冗談話か何かで先方の気分をやわらがせるというよくなタクトは彼には微塵みじんもなかつた。親しい間のものが気まずく

なつたほど気まずいものはない。彼はほとんど悒鬱ゆううつといつてもいいような不愉快な気持ちに沈んで行つた。おまけに二人をまぎらすような物音も色彩もそこには見つからなかつた。なげしにかかつている額といつては、くろずみきよう黒住教の教主の遺訓の石版と、大礼服を着ていかめしく構えた父の写真の引き延ばしとがあるばかりだつた。そしてあたりは静まり切つていた。基石の底のようだった。ただ耳を澄ますと、はるか遠くで馬鈴薯をこなしているらしい水車の音が単調に聞こえてくるばかりだつた。

父は黙つて考えごとでもしているのか、敷島を続けざまにふかして、膝の上に落とした灰にも気づかないでいた。彼はしようことなしに監督の持つて来た東京新聞の地方版をいじくりまわして

いた。北海道の記事を除いたすべては一つ残らず青森までの汽車の中で読み飽いたものばかりだった。

「お前は今日の早田の説明で農場のことはたいてい呑みこめたか」  
ややしばらくしてから父は取ってつけたようにぼつりとこれだけ言って、はじめてまともに彼を見た。父がくどくどと早田にいろいろな報告をさせたわけが彼にはわかったように思えた。

「たいていわかりました」

その答えを聞くと父は疑わしそうにちらつともう一度彼を鋭く見やった。

「ずいぶんめんどうなものだろう、これだけの仕事にでも眼鼻をつけるということは」

「そうですね」

彼はしかたなくこう答えた。父はすぐ彼の答えの響きの悪さに感づいたようだった。そしてまたもや忌わしい沈黙が来た。彼には父の気持ち十分に分かっていたのだ。三十にもなろうとする息子をつかまえて、自分がこれまでに払ってきた苦勞を事新しく言つて聞かせるのも大人気ないが、おとなげそうかといつて、農場に対する息子の熱意が憐れなほど燃えていないばかりでなく、自分に対する感恩の気持ちも格別動いているらしくも見えないその苦々しさで、父は老年にともすると付きまつわるはかなさと不満とに悩んでいるのだ。そして何事もずばずばとは言ひ切らないで、じつとひとりで胸の中に湛たえているような性せいじょう情にある憐れみさえ



を感じているのだ。彼はそうした気持ちで父から直接に彼の心の中に流れこむのを覚えた。彼ももどかしく不愉快だった。しかし父と彼との間隔があまりに隔たりすぎてしまったのを思うと、むやみなことは言いたくなかった。それは結局二人の間を彌縫びほうができないほど離してしまっただけのものだったから。そしてこの老年の父をそれほどの目に遇わせても平気でいられるだけの自信がまだ彼のほうにもできてはいなかった。だから本当をいうと、彼は誰に不愉快を感じるよりも、彼自身にそれを感じねばならなかったのだ。そしてそれがますます彼を引込み思案の、何事にも興味を感じぬらしく見える男にしてしまったのだ。

今夜は何事も言わないほうがいい、そうしまいに彼は思い定め

た。自分では気づかないでいるにしても、実際はかなり疲れているに違いない父の肉体のことも考えた。

「もうお休みになりませんか。矢部氏も明日は早くここに着くことになっていきますし」

それが父には暢気のんきな言いごとと聞こえるのも彼は承知していないではなかった。父ははたして内ない証こうしている不平に油をそそぎかけられたように思ったらしい。

「寝たければお前寝るがいい」

とすぐ答えたが、それでもすぐ言葉を続けて、

「そう、それでは俺わしも寝るとしようか」

と投げるように言って、すぐ廁かわやに立って行った。足は痺しびれを切

らしたらしく、少しよろよるとなつて歩いて行く父の後姿を見ると、彼はふつと深い淋しさを覚えた。

父はいつまでも寝つかないらしかった。いつもならば頭を枕につけるが早いかすぐいびき鼾になる人が、いつまでも静かにして、しげしげと厠に立った。その晩は彼にも寝つかれない晩だった。そして父が眠るまでは自分も眠るまいと心に定めていた。

二時を過ぎて三時に近いと思われるころ、父の寢床のほうからかすかな鼾が漏れ始めた。彼はそれを聞きすましてそつと厠に立った。縁板があしうら蹠に吸いつくかと思われるように寒い晩になっていた。高い腰の上は透明なガラス張りになつてゐる雨戸から空をすかして見ると、ちよつと指先に触れただけでガラス板が音をたて

て壊れ落ちそうに冴え切っていた。

将来の仕事も生活もどうなつてゆくかわからないような彼は、この冴えに冴えた秋の夜の底にひたりながら、言いようのない孤独に攻めつけられてしまった。

物音に驚いて眼をさました時には、父はもう隣の部屋で茶を啜っているらしかった。その朝も晴れ切った朝だった。彼が起き上がって縁に出ると、それを窺っていたように内儀さんが出て来て、忙しくぐるりの雨戸を開け放った。新鮮な朝の空気と共に、田園に特有な生き生きとした匂いが部屋じゆうにみなぎった。父は捨てどころに困じて口の中に啣んでいた梅干の種を勢いよくグーズベリーの繁みに放りなげた。

監督は矢部の出迎えに出かけて留守だったが、父の膝許ひざもとには、もうたくさんの帳簿や書類が雑然と開きならべられてあつた。

待つほどもなく矢部という人が事務所に着いた。彼ははじめてその人を見たのだつた。想像していたのとはまるで違つて、四十かっこう恰好の肥つた眇眼すがめの男だつた。はきはきと物慣れてはいるが、浮薄でもなく、わかるところは気持ちよくわかる質たちらしかつた。彼と差し向かいだつた時とは反対に、父はその人に対してことのほか快活だつた。部屋の中の空気が昨夜とはすっかり変わつてしまつた。

「なあに、疲れてなんかおりません。こんなことは毎度でござい  
ますから」

朝飯をすますとこう言つて、その人はすぐ身じたくにかかった。そして監督の案内で農場内を見てまわつた。

「私は実はこちらを拜見するのははじめで、帳場に任して何もさせていたもんでございますから、……もつとも報告は確実にさせていましたからけつしてお気に障るさわような始末にはなつていないつもりでございますが、なにしろ少し手を延ばして見ますと、体がいくつあつても足りませんので」

そう言つて矢部は快げに日の光をまともに受けながら声高に笑つた。その言葉を聞くと父は意外そうに相手の顔を見た。そして不安の色が、ちらりとその眼を通り過ぎた。

農場内を一とおり見てまわるだけで十分半日はかかった。昼少

し過ぎに一同はちようどいい疲れかげんで事務所に帰りついた。

「まずこれなら相当の成績でございます。私もお頼まれがいがあつたようなものかと思いますが、いかがな思おぼしめ召しでしょう」

矢部は肥っているだけに額に汗をにじませながら、高縁に腰を下ろすと疲れが急に出了たような様子でこう言つた。父にもその言葉には別に異議はないらしく見えた。

しかし彼は矢部の言葉をそのまま取り上げることはできなかつた。六十戸にあまる小作人の小屋は、貸附けを受けた当時とどれほど改まつているだろう。馬小屋を持つているのはわずかに五、六軒しかなかつたではないか。ただだつ広く土地が掘り返されて作づけされたというだけで成績が挙げつたということができる

ものだらうか。

玉蜀黍穀とうもろこしがらといたどりで周囲を囲って、麦稈むぎわらを積み乗せた

だけの狭い掘立小屋の中には、床も置かないで、ならべた板の上むしろに蓆を敷き、どの家にも、まさかりかぼちやが大鍋に煮られて、それが三度三度の糧かてになっているような生活が、開墾当時のまま続けられているのを見ると、彼はどうしてもあるうしろめたさを感ぜないではいられなかったのだが、矢部はいつたいそれをどう見ているのだらうと思った。しかし彼はそれについては何も言わなかった。

「ともかくこれから一つ帳簿のほうのお調べをお願いいたしまして……」



その人の癖らしく矢部はめつたに言葉に締めくくりをつけなかつた。それがいかにも手慣れた商人らしく彼には思われた。

帳簿に向かうと父の顔色は急に引き締まって、監督に対する時と同じようになつた。用のある時は呼ぶからと言うので監督は事務所の方に退けられた。

きちようめに正座して、父は例の皮表紙の懐中手帳を取り出して、かねてからの不審の点を、からんだような言い振りで問いつめて行つた。彼はこの場合、ふところ懐手をして二人の折衝を傍観する居心地の悪い立場にあつた。その代わり、彼は生まれてはじめて、父が商売上のかけひきをする場面にぶつかることができたのだ。父は長い間の官吏生活から実業界にはいつて、主に銀行や

会社の監査役をしていた。そして名監査役との評判を取っていた。いったい監査役というものが単に員に備わるといふような役目なのか、それとも実際上の威力を営利事業のうえに持っているものなのかさえ本当に彼にははつきりしていなかった。また彼の耳にはいる父の評判は、営業者の側から言われているものなのか、株主の側から言われているものなのか、それもよくはわからなかった。もし株主の側から出た噂うわさならだが、営業者間の評判だとすると、父は自分の役目に対して無能力者だと裏書きされているのと同様になる。彼はこれらの関係を知り抜くことには格別の興味をもっていたわけではなかったけれども、偶然にも今日は眼まのあたりそれを知るようなはめになった自分を見いだしたのだ。まだ見

なかった父の一面を見るといふ好奇心も動かないではなかった。けれどもこれから展開されるだろう場面の不愉快さを想像するこ  
とによつて、彼の心はどつちかといふと暗くされがちだった。

矢部は父の質問に気軽に答え始めた。その質問の大部分が矢部  
にとつては物の数にも足らぬ小さなことのように、

「さようですか。そういうことならそういたしても私どものほう  
ではけつして差し支えございませんが……」

と言つて、軽く受け流して行くのだった。思い入つて急所を突  
くつもりらしく質問をしかけている父は、しばしば背負い投げを  
食わされた形で、それでも念を押しように、

「はあそうですか。それではこの件はこれでいいのですな」

と附け足して、あとから訂正などはさせないぞという氣勢を示したが、矢部はたじろぐ風も見せずに平気なものだった。實際彼から見ていても、父の申し出の中には、あまりに些末さまつのことにわたって、相手に腹の細さを見透かされはしまいかと思う事もあつた。彼はそういう時には思わず知らずはらはらした。何処どこまでも謹きんかく恪で細心な、そのくせ商売人らしい打算うとに疎い父の性格が、あまりに痛々しく生粋の商人の前にさらけ出されようとするのが、劍けん呑のんにも氣の毒にも思われた。

しかし父はその持ち前の熱心と粘り氣とを武器にしてひた押しに押しで行った。さすがに商魂きたで鍛え上げたような矢部も、こいつはまだ出くわさなかつた手だぞと思うらしく、ふと行き詰まっ

て思案顔をする瞬間もあつた。

「事業の経過はだいたい得心が行きました。そこでと」

父は開墾を委託する時に矢部と取り交わした契約書を、「緊要書類」と朱書きした大きな状袋から取り出して、

「この契約書によると、成墾引継ぎのうえは全地積の三分の一をお礼としてあなたのほうに差し上げることになってるのですが……それがここに認めてある百二十七町四段歩なにがし……これだけの坪敷になるのだが、そのとおりですな」

と粗い皺あらのできた、短い、しかし形のいい指先で数字を指し示した。

「はいそのとおりで……」

「そうですね。ええ百二十七町四段二畝せぶなり歩也です。ところがこれ  
つぱかりの地面をあなたがこの山の中にお持ちになつていたとこ  
ろで万事に不便でもあろうかと……これは私だけの考えを言つて  
るんですが……」

「そのとおりでございます。それで私もとうから……」

「とうから……」

「さよう、とうからこの際には土地はただかないことにして、  
金でお願いができますれば結構だと存じていたのでございますが  
……しかし、なに、これとてもいわばわがままでございますから  
……御都合もございましょうし……」

「とうから」と聞きかえした時に父のほうから思わず乗り出した

けはい  
気配があつたが、すぐとそれを引き締めるだけの用意は欠いてい  
なかつた。

「それはこちらとしても都合のいいことではありません。しかし金  
高の上の折り合いがどんなものですか。昨夜早田と話をした時、  
聞きただしてみると、この辺の土地の売買は思いのほか安いもの  
ですよ」

父は例の手帳を取り出して、最近売買の行なわれた地所の価格  
を披露しにかかると、矢部はその言葉を奪うようにだいたいの相  
場を自分のほうから切り出した。彼は昨夜の父と監督との話を聞  
いていたのだが、矢部の言うところは（始終札幌にいてこの土地  
に來たのははじめてだと言つたにもかかわらず）けつしてけたを

はずれたようなものではなかった。それを聞く父は意外に思ったらしかったが、彼もちよつと驚かされた。彼は矢部と監督との間に何か話合いがちゃんとしてきているのではないかとふと思った。まして父がそううたぐるのは当然なことだ。彼はすぐ注意して父を見た。その眼は明らかに猜疑さいぎの光を含んで、鋭く矢部の眼をまともに見やつていた。

最後の白兵戦になったと彼は思った。

もう夕食時はとうに過ぎ去っていたが、父は例の一徹からそんなことは全く眼中になかった。彼はかくばかり迫り合つた空気をなごやかにするために、しばらくの休戦は都合のいいことだと思つたので、



「もうだ**いぶ**晩おそくなりましたから夕食にしたらどうでしょう」

と言つてみた。それを聞くと父の怒りは火の燃えついたように顔に出た。

「馬鹿なことを言うな。この大事なお話がすまないうちにそんな失礼なことができるものか」

と矢部の前で激しく彼をきめつけた。興奮が来ると人前などをかまつてはいない父の性癖だったが、現在矢部の前でこんなものの言い方をされると、彼も思わずかつとなつて、いわば敵を前に置いて、自分の股肱ここうを罵る將軍が何処どこにいるだろうと憤ろしかつた。けれども彼は黙つて下を向いてしまったばかりだった。そして彼は自分の弱い性格を心の中でもどかしく思っていた。

「いえ手前でございますならまだいただきたくはございませんから……全くこのお話は十分に御了解を願うことにしないとなんでございますから……しかし御用意ができましたのなら……」

「いやできておつても少しもかまわんです」

父は矢部の取りなし顔な愛想に対してにべなく応じた。父はすぐ元の問題に返った。

「それは早田からお聞きのことかもしれんが、おつしやつた値段は松沢農場に望み手があつて折り合つた値段で、村一帯の標準にはならんのですよ。まず平均一段歩二十円前後のものでしうか」

矢部は父のあまりの素朴さにユウモアでも感じたような態度で、にこやかな顔を見せながら、

「そりや……しかしそれじゃ全く開墾費の金利にも廻りませんか  
らなあ」

と言ったが、父は一気にせきこんで、

「しかし現在、そうした売買になつてるのだから。あなた今開墾  
費とおっしゃったが、こうつと、お前ひとつ算盤そろばんをおいてみる」

さきほどの荒い言葉の埋合せでもするらしく、父はやや面をや  
わらげて彼の方を顧みた。けれども彼は父と同様珠算というもの  
を全く知らなかった。彼がやや赤面しながらそこらに散らばつて  
いる白紙と鉛筆とを取り上げるのを見た父は、またしても理材に  
かけての我が子の無能さをさらけ出したのを悔いて見えた。けれ  
ども息子の無能な点は父にもあったのだ。父は永年国家とか会社

銀行とかの理財事務にたずさわっていたけれども、筆算のことにかけては、極度に鈍重だった。そのために、自分の家の会計を調べる時でも、父はどうかするとちよつとした計算に半日もすわりこんで考えるような時があつた。だから彼が赤面しながら紙と鉛筆とを取り上げたのは、そのまま父自身のやくざな肖像画にも当たるのだ。父は眼鏡の上からいまいましそうに彼の手許をながめやつた。そして一段歩に要する開墾費のだいたいをしめ上げさせた。

「それを百二十七町四段二畝歩にするといくらになるか」

父はなお彼の不器用な手許から眼を放さずにこう追っかけて命令した。そこで彼はもうたじろいでしまった。彼は矢部の眼の前

に自分の愚かしさを暴露するのを感じつつも、たどたどしく百二十七町を段に換算して、それに四段歩を加え始めた。しかし待ち遠しそうに二人からのぞき込まれているという意識は、彼の心の落ち着きを狂わせて、ややともすると簡単な九々すらが頭に浮かび上がって来なかった。

「そこは七じやなからうが、四だらうが」

父はこんな差出口をしていたが、その言葉がだんだん荒々しくなったと思うと、突然「ええ」と言つて彼から紙をひったくつた。「そのくらいのができんでどうするのか」

明らかと怒号だった。彼はむしろ呆氣あつけに取られて思わず父の顔を見た。泣き笑いと怒りと入れ交つたような口惜しげな父の眼も

烈しく彼を見込んでいた。そして極度の侮蔑ぶべつをもって彼から矢部の方に向きなおると、

「あなたひとつお願いしましょう、ちよつと算盤そろばんを持ってください」

とほとほと好意をこめたと聞こえるような声で言った。

矢部は平気な顔をしながらすぐさま所要の答えを出してしまつた。

もうこれ以上彼のいる場所ではないと彼は思った。そしてふいと立ち上がるとかまわずに事務所の方に行つてしまった。

座敷とは事かわつて、すっかり暗くなつた囲炉いろり裡のまわりには、集まつて来た小作人を相手に早田が小さな声で浮世話をしていた。

内儀おかみさんは座敷の方に運ぶ膳ぜんのものが冷えるのを気にして、腕わんのものをまたもとの鍋にかえしたりしていた。彼がそこに出て行くのと、見る見るそこの一座の態度が変わって、いやな不自然さがみなぎってしまった。小作人たちはあわてて立ち上がるなり、草鞋わらじのままの足を炉ばたから抜いて土間どまに下り立つと、うやうやしく彼に向かつて腰を曲げた。

「若い旦那だんな、今度はまあ御苦勞様でございます」

その中で物慣れたらしい半白の丈たけの高いのが、一同に代わつてのようになら言つた。「御苦勞はこつちのことだぞ」そうその男の口の裏は言っているように彼には感じられた。不快な冷水を浴びた彼は改めて不快な微温湯を見舞われたのだ。それでも彼は

能<sup>あた</sup>うかぎり小作人たちに対して心置きなく接していたいと願った。それは単にその場合のやり切れない気持ちから自分のがれ出たかったからだ。小作人たちと自分とが、本当に人間らしい気持ちで互いに膝<sup>ひざ</sup>を交えることができようとは、夢にも彼は望み得なかつたのだ。彼といえどもさすがにそれほど自己を偽<sup>ぎまん</sup>瞞することはできなかつた。

けれどもあまりといえばあんまりだった。小作人たちは、「さあ、ずっとお寄りなさつて。今日は晴れているためかめつきり冷えますから」

と早田が口添えするにもかかわらず、彼らはあてこすりのように暗い隅っこを離れなかつた。彼は軽い捨て鉢な気分でその人た



ちにかまわず<sup>いろり</sup>囲炉裡の横座にすわりこんだ。

内儀<sup>おかみ</sup>さんがランプを座敷に運んで行ったが、帰つて来ると父からの言いつけを彼に伝えた。それは彼が小作人の一人一人を招いて、その口から監督に対する訴訟と、農場の規約に関する希望とを聞き取っておく役廻りで、昨夜寝る時に父が彼に命令した仕事だった。小作人が次々に事務所をさして集まつて来るのもそのためだったのだ。

事務所に薄ぼんやりと灯が<sup>とも</sup>点された。燻<sup>くんせい</sup>製の魚のような香いと、燃えさしの薪の煙とが、寺の庫裡<sup>くら</sup>のようにがらんと<sup>くろ</sup>黝ずんだ広間と土間とにこもつて、それが彼の頭の中へまでも浸み透つてくるようだった。なんともいえない嫌悪の情が彼を<sup>い</sup>焦ら立たせる

ばかりだった。彼はそこを飛び出して行って畑の中の広い空間に突っ立って思い存分の呼吸がしたくてたまらなくなった。壁訴訟じみたことをあばいてかかって聞き取らねばならないほど農場というものの経営は入り組んでいるのだろうか。監督が父の代から居ついていて、着実に正直なばかりでなく、自分を一人の平凡人であると見切りをつけて、満足して農場の仕事だけを守っているのは、彼の歩いて行けそうな道ではなかったけれども、彼はそういう人に対して暖かい心を持たずにはいられなかった。その人を除けものにしておいて、他人にその噂うわさをさせて平気で聞いていることはどうしても彼にはできないと思つた。

ともかく、彼は監督に頼んで執務室に火を入れてもらつて、小

作人を一人一人そこに呼び入れた。そして農場の経営に関する希望だけを聞くことにした。五、六人の人が出はいりする前に、彼は早くもそんなことをする無益さを思い知らねばならなかった。頭の鈍い<sup>にぶ</sup>人たちは、申し立つべき希望の端くれさえ持ち合わせてはいなかったし、才覚のある人たちは、めったなこととはけっして口にしなかった。去年も今年も不作で納金に困る由をあれだけ<sup>にお</sup>わしておくきながら、いざ一人になるとそんな明らかなことさえ訴えようとする人はなかった。彼はそれでも十四、五人までは我慢したが、それで全く絶望してもう小作人を呼び入れることはしなかった。そして火鉢の上に<sup>おお</sup>掩いかぶさるようにして、一人で考えこんでしまった。なんとすることもなく、父に対する反抗の気持

ちが、押さえても押さえても湧き上がってきて、どうすることもできなかった。

ほど経てから内儀おかみさんが恐る恐るやって来て、夕食のしたくが

できたからと言って来た。食慾は不思議になくなっていたけれども、彼はしようことなしに父の座敷へと帰って行つた。そこはも

うすつきりかたづけられていて、矢部を正座に、父と監督とが鼎か

なえぎ座になつて彼の来るのを待っていた。彼は押し黙つたまま自分

の座についたが、部屋にはいるとともに感ぜずにはいられなかつたのは、そこにただよっているなんともいえぬ気まずい空気だつた。さきほどまで少しも物にこだわらないで、自由に話の舵かじを引いていた矢部がいちばん小むずかしい顔になっていた。彼の来る

のを待つて箸はしを取らないのだと思つたのは間違いらしかった。

矢部は彼が部屋にはいつて来るのを見ると、よけい顔色を険けわしくした。そしてとうとうたまりかねたようにその眇眼すがめで父をにらむようにしながら、

「せっかくのおすすりめではございますが、私は矢張り御馳走にはならずたに発たつて札幌さっぽろに帰るといたします。なに、あなた一晩先に帰つていませば一晩だけよけい仕事ができるというものでございますから……私は御覽のとおりあおぞうの青造ではございますが、幼少から商売のほうではずいぶんたたきつけられたもので……しかし今夜ほどあらぬお疑いを被つて男を下さげたことは前後にござい  
ますまいよ。とにかく商売だつて商売道と申します。不束ふつつかなが

らそれだけの道は尽くしたつもりでございしますが、それを信じていただけなければお話には継ぎ穂の出ようがありません。：じや早田君、君のことは十分申し上げておいたから、これからこちらの人になって一つ堅固にやってあげてくださいまし。……私はこれで失礼いたします」

とはきはき言つて退けた。彼にはこれは実に意外の言葉だった。父は黙つてまじまじと癩癩玉かんしやくだまを一時に敲たたきつけたような言葉を聞いていたが、父にしては存外穏やかななだめるような調子になつていた。

「なにも俺わしはそれほどあなたに信用を置かんといいものではないのですが、事務はどこまでも事務なのだから明らかにしておか

ければ私の気が済まんのです。時刻も遅いからお泊りなさい今夜は」

「ありがとうございますが帰らせていただきます」

「そうですか、それではやむを得ないが、では御相談のほうは今までのお話どおりでよいのですな」

「御念には及びません。よいようにお取り計らいくださればそれでもう結構でございます」

矢部はこのうえ口をきくのもいやだという風で挨拶一つすると立ち上がった。彼と監督とは事務所のほうまで矢部を送って出たが、監督が急がしく靴をはこうとしているのを見ると、矢部は押しかえすような手つきをして、

「早田君、君が送ってくれては困る。荷物は誰かに運ばせてください。それでなくてさえ且那はお互いの間を妙にからんで疑つておいでになるのだ。しかし君のことはよくお話しておいたから……万事が落着くまでは君は私から遠退とおのいてるようにしてくださいませよ」

それから矢部は彼の方に何か言いかけようとしたが、彼に対してさえ不快を感じたらしく、監督の方に向いて、

「六年間ただぼうこう只奉公してあげくの果はてに痛くもない腹を探られたのは全くお初はつだよ。私も今夜という今夜は、慾もへちまもなく腹を立てちやつた。じゃこちらがすっかりかたずいたうえで、札幌にも出ておいでなさい。その節万事私のほうのかたはつけますか



ら。御免」

「御免」という挨拶だけを彼に残して、矢部は星だけがきらきら輝いた真暗なおもてへ駈<sup>か</sup>け出すように出て行ってしまった。彼はそこに立つたまま、こんな結果になった前後の事情を想像しながら遠ざかってゆく靴音を聞き送っていた。

その晩父は、東京を発<sup>た</sup>つた時以来何処に忘れて来たかと思うような笑い顔を取りもどして晩酌を傾けた。そこに行くときあまり融通のきかない監督では物足らない風で、彼を対<sup>あいて</sup>手に話を拈<sup>ひ</sup>げて行くようにしたが、彼は父に対する胸いっぱいの反感で見向きもしたくなかった。それでも父は気に障<sup>さ</sup>えなかった。そしてしかたなしに監督に向きなおって、その父に当たる人の在世当時の思い出話

などをして一人興きようがった。

「元氣のいい老人だったよ、どうも。酔うといつでも大肌おおはだぬぎになつて、すわつたままひとり角力ずもうを取つて見せたものだったが、どうした癖か、唇を締めておいて、ぷっぷつと唾つばきを霧のように吹き出すのには閉口した」

そんなことをおおげさに言いだして父は高笑いをした。監督も懐旧の情を催すらしく、人のいい微笑を口のはたに浮かべて、

「ほんとにそうでした」

と氣のなさそうな合あいづち槌づちを打っていた。

そのうちに夜はいいかげん更ふけてしまった。監督が膳を引いてしまふと、氣まずい二人が残った。しかし父のほうは少しも氣ま

ずそうには見えなかつた。矢部の前で、十一、二の子供でも叱しかりつけるような小言を言ったことなどもからつと忘れてしまつていゝるようだつた。

「うまいことに行つた。矢部という男はかねてからなかなか手ごわいりこうもの伶俐者だとにらんでいたから、俺わしは今日の策戦には人知れぬ苦勞をした。そのかいあつて、先方がとうとう腹を立ててしまつたのだ。掛引きで腹を立てたら立てたほうが負け勝負だよ。貸し越しもあつたので実はよけい心配もしたのだが、そんなものを全部差し引くことにして報酬共に五千円で農場全部がこちらのものになつたのだ。これでこの農場の仕事は成功に終わったといつていいわけだ」

「私には少しも成功とは思えませんが……」

これだけを言うのにも彼の声は震えていた。しかし日ごろの沈黙に似ず、彼は今夜だけは思う存分に言ってしまったわなければ、胸に物がつまっていて、当分は寝ることもできないような暴れた<sup>あば</sup>気持ちになってしまっていたのだ。

「今日農場内を歩いてみると、開墾のはじめにあなたとここに来ましたね、あの時と百姓の暮らし向きは同じなのに私は驚きました。小作料を徴収したり、成墾費が安く上がったことには成功したかもしれませんが、農場としてはいったいどこが成功しているんでしょう」

「そんなことを言ったってお前、<sup>みずのみひやくしやう</sup>水呑百姓といえはいつの

世にでも似たり寄つたりの生活をしているものだ。それが金持ちになつたら汗水垂らして畑をするものなどは一人もいなくなるだろう」

「それにしてもあれはあんまりひどすぎます」

「お前は百歩をもつて五十歩を笑つとるんだ」

「しかし北海道にだって小作人に対してずっといい分割りを与えているところはたくさんありますよ」

「それはあつたとしたら帳簿を調べてみるがいい、きつと損をしているから」

「農民をあんな惨めな状態みじにおかなければ利益のないものなら、農場という仕事はうそですね」

「お前は全体本当のことがこの世の中にあるとでも思つとるのか」  
父は息子の融通のきかないのにも呆れるあきというようにそつぽを  
向いてしまった。

「思つてはいませんがね。しかし私にはどうしても現在のよう  
うそばかりで固めた生活ではやり切れません。矢部という人に対  
してのあなたの態度なども、お考えになつたらあなたもおいやで  
しょう。まるでぺてんですものね。始めから先方に腹を立てさす  
つもりで談判をするなどというのは、馬鹿馬鹿しいくらい私には  
いやな気持ちです」

彼は思い切つてここまで突つ込んだ。

「お前はいやな気持ちか」

「いやな気持ちです」

「俺わしい気持ちだ」

父は見下だすように彼を見やりながら、おもむろに眼鏡をはずすと、両手で顔を逆さかなでになで上げた。彼は憤激ではち切れそうになった。

「私はあなたをそんなかただとは思っていませんでしたよ」

突然、父は心の底から本当の怒りを催したらしかった。

「お前は親に対してそんな口をきいていいと思つとるのか」

「どこが悪いのです」

「お前のような薄ぼんやりにはわかるまいさ」

二人の言葉はぎこちなく途切れてしまった。彼は堅い決心をし

ていた。今夜こそは徹底的に父と自分との間の黒白をつけるまでは夜明かしでもしよう。父はややしばらく自分の怒りをもて余しているらしかったが、やがて強いてそれを押さえながら、ぴちりぴちりと句点でも切るように話し始めた。

「いいか。よく聞いていて考えてみる。矢部は商人なのだぞ。商売というものはな、どこかで嘘うそをしなければ成り立たん性質のものなのだ。昔から士農工商というが、あれは誠と嘘との使いわけの程度によって、順序を立てたので、仕事の性質がそうなっているのだ。ちよつと見るとなんでもないようだが、古人の考えにはおろそかでないところがあるだろう。俺わしは今日その商人を相手にしたのだから、先方の得手に乗せられては、みすみす自分で自



分を馬鹿者にしていることになるのだ。と行ってからに俺わしには商人のような嘘はできないのだから、無理押しにでも矢部の得手を封ずるほかはないではないか」

彼はそんな手にはかかるものかと思つた。

「そんならある意味で小作人をあざむいて利益を壟ろうだん断している地主というものはあれはどの階級に属するのでしょうか」

「こう言えばああ言うそのお前の癖は悪い癖だぞ。物はもつと考えてから言うがいい。土地を貸し付けてその地代を取るの何がいつわりだ」

「そう言えば商人だつていくぶん人の便利を計つて利益を取つて  
いるんですね」

理につまったのか、怒りに堪えなかつたのか、父は押し黙ってしまった。禿はげ上がった額の生え際ぎわまで充血して、手あたりしだいに巻煙草を摘つまみ上げて囲炉裡いろりの火に持ってゆくその手は激しく震えていた。彼は父がこれほど怒つたのを見たことがなかつた。父は煙草をそこまで持つてゆくと、急に思いかえして、そのまま畳の上に投げ捨ててしまった。

ややしばらくしてから父はきわめて落ち着いた物腰でさとすように、

「それほど父に向かつて理屈が言いたければ、立派に一人前の仕事をして、立派に一人前の生活ができたうえで言うがいい。何一つようし得ないで物を言ってみたところが、それは得手勝手とい

うものだぞ……聞いていればお前はさつきから俺わしのすることを嘘だ嘘だと言いののしつとるが、お前は本当のことを何処どこでしたことがあるかい。人と生まれた以上、こういう娑婆しやばにいればいやでも嘘をせにやならんのは人間の約束事なのだ。嘘の中でもできるだけ嘘をせんようにと心がけるのが徳というものなのだ。それともお前は俺わしの眼の前に嘘をせんではない世の中を作ってみせてくれるか。そしたら俺わしもお前に未練なく兜かぶとを脱ぐがな」

父のこの言葉ははつしと彼の心の真ま唯中ただなかを割って過ぎた。実際彼は刃のようなひやつとしたものを肉体のどこかに感じたように思った。そして凝り上がるほど肩をそびやかして興奮していた自分を後ろうしめたく見いだした。父はさらに言葉を続けた。

「こんな小さな農場一つをこれだけにするのに俺わしがどれほど苦心をしたかお前は現在見ていたはずだ。いらざる取り越し苦労ばかりすると思うかもしれないが、あれほどの用意をしても世の中の事は水が漏れたがるものでな。そこはお前のような理屈ぺん一遍ではとてもわかるまいが」

なるほどそれは彼にとつては手痛い刃だ。そこまで押しつめられると、今までの彼は何事も言い得ずに黙ってしまった。しかし今夜こそはそこを突きぬけよう。そして父に彼の本質をしつかり知ってもらおうと心を定めた。

「わからないかもしれません。実際あなたが東京を発たつ前からこの事ばかり思いつめていらつしやるのを見ていると、失礼ながら

お気の毒にさえ感じたほどでした。……私は全くそうした理想屋です。夢ばかり見ているような人間です。……けれども私の気持ちもどうか考えてください。私はこれまで何一つしでかしてはいません。自体何をすればいいのか、それさえ見きわめがついていないような次第です。ひよつとすると生涯こうして考えているばかりで暮らすのかもしれないんですが、とにかく嘘をしなければ生きて行けないような世の中が無我無性にいやなんです。ちよつと待つてください。もう少し言わせてください。……嘘をするのは世の中ばかりじゃもちろんありません。私自身が嘘のかたまりみたいなものです。けれどもそうでありたくない気持ちかやたらに私を攻め立てるのです。だから自分の信じている人や親しい人が

私の前で平気で嘘をやっているのを見ると、思わず知らず自分のことは棚に上げて腹が立つてくるのです。これもしかたがないと思うんですが、……」

「遊んでいて飯が食えると自由自在にそんな気持ちも起こるだろうな」

何を太平楽を言うかと言わんばかりに、父は憎々しく皮肉を言った。

「せめては遊びながら飯の食えるものだけでもこんなことを言わなければ罰ばちがあたりますよ」

彼も思わず皮肉になった。父に養われていればこそこんなはずかしめも受けるのだ。なんという弱い自分だろう。彼は皮肉を言

いながらも自分のふがいなさをつくづく思い知らねばならなかった。それと同時に親子の關係がどんな釘に引つかかっているかを垣間見たようにも思った。親子といえども互いの本質にくると赤の他人にすぎないのだなという淋しさも襲つてきた。乞食こじきにでもなつてやろう、彼はその瞬間はたとそう思つたりした。自分の本質のために父が甘んじて衣食を給してくれているとの信賴が、三十にも手のとどく自分としては虫のよすぎることだったのだと省みられた。

おそらく彼のその心の動きが父に鋭く響いたのだらう、父は今までの怒りに似げなく、自分にも思いがけないようなため息を吐いた。彼は思わず父を見上げた。父は畳一畳ほどの前をじつと見

守つて遠いことでも考えているようだった。

「俺わしがこうして齷齷あくせくとこの年になるまで苦勞しているのもおかしいことだが……」

父の声は改まってしんみりとひとりごとのようになつた。

「今お前は理想屋だとか言つたな。それだ。俺わしはこのとおりの男だ。土百姓同様の貧乏士族の家に生まれて、生まれるとから貧乏には慣れてゐる。物心のついた時には父は遠島になつていて母ばかりの暮らしだったので、十二の時にもう元服して、お米倉の米合を書いて母と子二人が食いつないだもんだつた。それに俺わしには道楽という道楽も別段あるではなし、一家が暮らして行くのにはもつたないほどの出世をしたといつてもいいのだ。今のよ



うなぜひたくは実は俺わしにとつては法外なことだがな。けれどもお前ははじめ五人の子を持ってみると、親の心は奇妙なもので先の先まで案じられてならんだ。……それにお前は、俺わしのしつけが悪かったとでもいうのか、生まれつきなのか、お前の今言つた理想屋で、てんで俗世間のことには無頓着だからな。たとえばお前が世過ぎのできるだけの仕事にありついたらとしても、弟や妹たちになんかやくぎ者ができるか、不仕合わせが持ち上がるかしれたものではないのだ。そうした場合にこの農場にでもはいり込んで土をせせていればともかくにも食いつないでは行けるだろうと思つたのが、こんなめんどろな仕事を始めた俺わしの趣意なのだ。……長男となれば、日本では、なんといいってもお前にあとの

子供たちのめんどうがかかるのだから……」

父の言葉はだんだん本当に落ち着いてしんみりしてきた。

「俺わは元がんらい来金らいのことにかけては不得手至極なほうで、人一倍に苦心をせにや人並みの考えが浮かんで来ん。お前たちから見たら、この年をしながら金のことばかり考えていると思うかもしらんが、人が半日で思いつくところを俺わは一日がかりでやつと追いついて行くありさまだから……」

そう言つて父は取つてつけたように笑つた。

「今の世の中では自分がころんだが最後、世間はふり向きもしないのだから……まあお前も考えどおりやるならやつてみるがいい。お前がなんと思おうと俺わは俺わしは俺わしだけのことはして行くつもりだ。

……『その義にあらざれば一介も受けず。その義にあらざれば一介も与えず』という言葉があるな。今の世の中でまず嘘のないのはこうした生き方のほかにはないらしいて」

こう言つて父はぽつとりと口をつぐんだ。

彼は何も言うことができなくなつてしまつた。「よしやり抜くぞ」という決意が鉄丸のように彼の胸の底に沈むのを覚えた。不思議な感激——それは血のつながりからのみ来ると思わしい熱い、しかし同時に淋しい感激が彼の眼に涙をしぼり出そうとした。

かわや  
厠に立つた父の老いた後姿を見送りながら彼も立ち上がった。

縁側に出て雨戸から外を眺めた。北海道の山の奥の夜は静かに深更へと深まつていた。大きな自然の姿が遠く彼の眼の前にひろ拡がつ

て  
い  
た。  
。

# 青空文庫情報

底本：「カインの末裔」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年10月30日改版初版発行

1991（平成3）年7月20日改版25版発行

初出：「泉」

1923（大正12）年5月

入力：鈴木厚司

校正：土屋隆

2006年5月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 親子

有島武郎

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>